

臨床実習における指導上の課題

— 学生の専門職看護婦に対する認識をとおして —

勝野久美子¹⁾ 草野美根子¹⁾ 朝長まり子¹⁾
中古賀明子¹⁾ 中島 規子²⁾

要 旨 3年間の看護基礎教育の中で、およそ10ヶ月に及ぶ臨床実習の意義は大きい。当学科では、専門職としての能力を備えた看護婦の育成を目指し、より効果的な実習が展開できるよう努力している。その一端として、臨床実習を終了した学生に対し、専門職看護婦としての認識を問い、グループワークをとおして自己啓発の機会を設けた。

本稿では、その際個々の学生が具体例として記入したラベルを収集、分析し、臨床実習指導の視点から考察を加えた。結果として、学生は看護婦としての未熟さを「技術」の不足として捉えていた。その中で、コミュニケーション技術を主とした「精神的援助」が最も多く、次いで「注射」「清潔操作」に対し不安を抱いていることが分かった。学生の認識上の問題として、技術偏重の傾向も危惧され、技術項目の精選、知識・技術・態度のバランスのとれた教育の必要性を確認した。

長大医短紀要1: 145-148, 1987

Key Words : 臨床実習, 専門職看護婦

I はじめに

看護の基礎教育では、看護婦としての基本的な知識・技術・態度を身につけ、主体的な看護活動が展開できることを目的としている。ことに臨床実習では、学内で学んだ看護の本質的な要素をあらゆる対象・場面で応用し、問題解決へ向けて適切な行動がとれるよう教育的意図が払われている。

本学科の臨床実習における目的も「看護に関する基本的な知識と技術を実践の場を通じて修得し、かつ実践の場で展開して行く能力

を養う。同時に全人的医療の立場を理解すると共に、自らの人間性の涵養に務める」として、学生が保健医療活動における看護婦の役割を認識し、専門職能看護婦として社会に適応できることを目指している。

現在、学生は受け持ち患者の看護を中心に、目標達成に向け実習を行なっている。今回、実習終了時の学生の認識を把握するため、「プロフェッショナルナースとしてあなたに欠けるもの」を問いかけてみた。その内容を分析した結果、今後の指導上の示唆を得たので報告する。

1) 看護学科 : 長崎大学医療技術短期大学部 2) 神戸市立看護短期大学

II 目 的

1. 専門職看護婦に対する学生の認識を高め、自己啓発を促す。
2. 専門職として必要な「知識」「技術」「態度」を修得させるための指導上の課題を検討する。

III 対象および方法

<対象>

長崎大学医療技術短期大学部看護学科3年生48名

<方法>

1. グループワーク（8グループ・各6名）
 テーマ：“プロフェッショナルナースとしてあなたに欠けるものは？”
 - 1) テーマにそった具体例を1例につき1枚のラベルに記入する。（個人作業）
 - 2) 同義のラベルを分類・図式化し、問題点を明確にする。（グループワーク）
2. 教官によるラベル内容の検討
 - 1) 全ラベルを下記の視点から分類する。
 「知識」：学習および理解力の不足によると思われるもの
 「技術」：準備や手順等の原則的手技の未熟さによると思われるもの
 「態度」：社会的マナーや目的意識・意欲・積極性に欠けるとと思われるもの
 - 2) 学生が分類した「技術」に関するラベルの内容を再分類し、学生と教官の認識の違いを明らかにする。

IV 結 果

1. 回収したラベルは366枚、1人平均7.6枚であった。ラベルによっては「知識」「技術」「態度」の単独の要素でなく、複数の要素が含まれていたために7つのカテゴリーで分類した。結果は表1の通りである。
2. 「技術」に関する4つのカテゴリーの

表1. 三要素（知識・技術・態度）によるラベルの分類

要 素	ラベルの枚数
知 識	30
技 術	152
態 度	82
知識・技術	20
知識・態度	31
技術・態度	43
知識・技術・態度	8

表2. 「技術」の項目別分類

項 目	ラベルの枚数
精神的援助	52
注 射	30
清潔操作	23
患者指導	18
身体の清潔	13
観 察	13
（その他	74）

ラベル223枚を項目別に分類した。その結果、表2のように「精神的援助」「注射」「清潔操作」が上位を占めた。

3. 学生が「技術」に関することとして分類したラベルは173枚あった。その中で、我々が「技術」単独の要素と判断したラベルは図1のように121枚であった。「技術」と他の要素の組みあわせのラベルが32枚、「技術」とは全く関連のないラベルも20枚含まれていた。

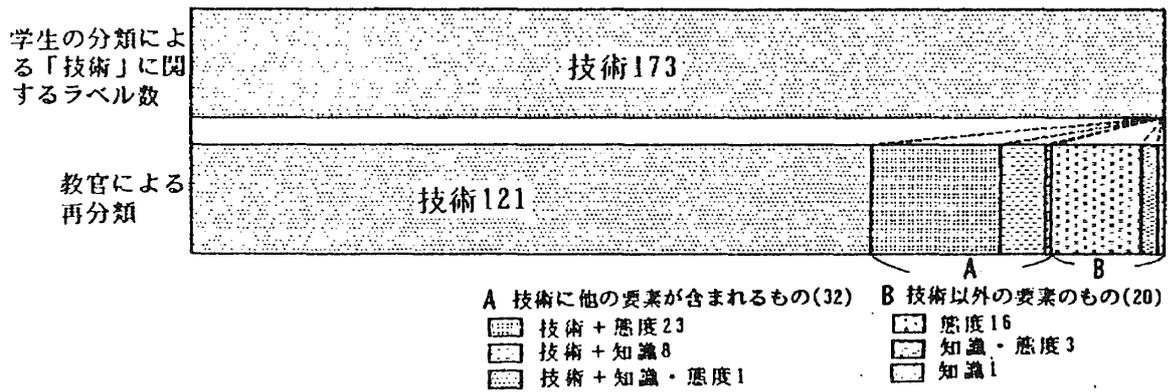


図1. 「技術」の再分類

V 考 察

1. 学生はグループワークをとおり、366の場面で“プロフェッショナルナース”として自己の言動を振り返り、看護婦としての認識を発展させる機会をもった。学生が最も多くとりあげていたものは「技術」に関する内容であった。このことは、経験不足による技術の未熟さが、学生の不安となっていることを示唆している。そこで「技術」に関するラベルを項目別に分類し、その主な項目について内容を分析してみた。
2. 「技術」に関するラベルの中で、最も多かったのが「精神的援助」であった。精神的援助は、技術としてすぐに上達していくものではなく、また結果がはっきり見えるものでもない。多くの学生が、技術としての未熟さを感じたのも当然の結果といえる。なかでも大半を占めたのが、手術を受ける患者や悪性疾患患者への精神的援助であった。たとえば「手術を受ける患者が不安状態で何度も同じ質問を繰り返しているとき、患者が安心するように説明することができなかった」「悪性腫瘍とうすうす気付いている患者に病気のことを聞かれ、答えに困ったしまった」などである。これらは学生のみ

ならず、臨床で働く看護婦にとっても戸惑うことの多い場面である。精神的援助は、学生一人の力で解決できるものではなく、スタッフと協力して援助していきえるような助言が大切になってくる。さらに、プロセスレコードやロールプレイング等を活用し、自己の振り返りができる機会を増やさなければならぬであろう。

次に多いものは「注射」に関する内容であった。ラベルの中では、「筋肉注射の時、手が震えて針がぐらついた。患者は痛そうな顔をしている。技術の未熟さを感じた」に類似するものが多かった。注射は直接的医療行為で患者に痛みや恐怖を与えるため、学生の緊張を高めているのではないだろうか。実施時には常に学生に付き添い、リラックスさせるための声かけや患者に対する配慮も重要である。また注射は人体による練習ができにくく、事前の自己学習が困難である。しかし、「アンプルから薬液を吸い上げる時、注射器、扱い方が悪く不潔にしまった」のように、注射器の取り扱いなど事前に練習可能なものは、学生が積極的に取りくめるよう配慮したい。そして基本的手順を充分理解させ、デモンストレーションをわかりやすく行うことが必要である。

次に「清潔操作」に関するラベルは、手術室と包帯交換の二つの場面に分けられる。手術室の場面では、「ガウンテクニック介助時に清潔者に触れ不潔にしまった」という内容が多かった。このような場面では、患者の状況に応じ正確かつ機敏な行動が要求される。複数の医師や看護婦の中で医療処置を円滑にすすめるなくてはならないという緊迫感が、学生の動きを一層制約している。同様のことが包帯交換の場面でも言えるのではないだろうか。学生は、緊迫した環境の中でも的確な判断の伴った行動がとれるよう、確実な無菌操作を身につけていかなければならない。また医療チームの一員として、自覚をもった行動ができるよう指導していく必要がある。

3. 「技術」に関するものとして学生自身が分類したラベルを我々が再分類すると、約30% (52枚) に他の要素が含まれていた。複数の要素が含まれている場面でも、学生はテクニックの未熟さによるものとしてとらえている。専門職 = テクニシャンをイメージして手技の到達だけを求め、専門職者へ性急に近づこうとしているのではないだろうか。学生は、看護婦の行う「技術」が単なる手技ではなく、専門職者としての態度と知識・理論に基づいたものではなくてはならないことを認識しておく必要がある。

VI おわりに

今回、実習終了時の学生の意識を分析した結果、「技術」に対する不安を多く抱いてい

ることがわかった。したがって、実習終了までに修得すべき基本的技術を提示し、すべての学生が経験できるように配慮していく必要があると考える。あわせて、学生が過度の緊張を抱かないように、個々のレベルに応じた配慮を行い、的確な判断と理論に基づく技術が実践できるよう指導して行きたい。

また、学生はプロフェッショナルナースとしての成長を急ぐあまり、技術を偏重し、片寄った看護活動を展開しがちである。看護活動は、「知識」「技術」「態度」単独で展開させることはできない。我々は、三要素のバランスよく統合されたプロフェッショナルナースとして学生が成長できるよう指導にあたりたい。

参考文献

- 1) 伊藤暁子：臨床実習指導の現状と課題。ナースステーション, 17 (4), 4~17, 1987.
- 2) 上田弘子：看護学生の臨床実習に対する意識の実態。第16回日本看護学会集録(看護教育), 日本看護協会出版会, 85~88, 1985.
- 3) 茶園美香, 小川みち子, 花岡真佐子, 丸地信弘, 松田正巳：効果的な臨床実習を行うための指導者のあり方——場的視点による検討——第15回日本看護学会集録(看護教育), 日本看護協会出版会, 149~152, 1984.
- 4) 福田春枝, 鹿村真理子, 正田美智子：学内実習における基礎看護技術の展開。看護教育, 28 (13), 774~781, 1987.

(1987年12月28日受理)